

スペイン語圏を知る本(その29)

『スペイン語の文法書』

評者 坂東 省次

スペイン語の人口は3億5千万といわれるが、英語の国アメリカ合衆国、ポルトガル語の国ブラジル、多言語主義のEU諸国など世界各地で、スペイン語学習者は増加の一途を辿っており、今世紀中には4億から5億に達することが推測されている。

このようなスペイン語学習者の世界的増加現象をまえに、スペインではスペイン語を経済資源としてとらえ、多数の出版社が世界の市場をねらって、近年、夥しい数のスペイン語の辞典、参考書、教科書を出版している。日本でも、従来、外国語と言えば英語、フランス語、ドイツ語が主流であったが、1992年頃からスペイン語学習者が増加して、スペイン語は今や飛ぶ鳥を落とす勢いで日本人の間に普及している。いきおいスペイン語の辞典、参考書、教科書が矢継ぎ早に出版されて、書店の語学書コーナーのスペイン語関係書の棚もかなり埋まってきた感が強い。ただし、その大半は売れる本つまり初級者を対象にした入門書が占め、同じようなタイプの本の出版に最近はいささかうんざりしていたが、そんな中で2001年には小林一宏ほか『詳解スペイン語』(上智大学出版会)が、また今年2003年には江藤一郎『基本スペイン語文法』(芸林書房)といった本格的な参考書が登場して、安心もし喜んでみいる。

『詳解スペイン語』は長年、上智大学のスペイン語の授業で使用されてきた印刷教材がベースになっている。40課からなり、各課は諺、対話、文法項目からなる。興味深いのは、「点過去」や「線過去」といった従来の妙な文法表現を踏襲せず、「単純完了過去」、「未完了過去」を使ったり、文の構造による分類に英語で使われる「単文」「重文」「複文」を用いているといった新しい視点

の導入であろうか。ただ、本書には例文に和訳もなければ、テープもCDも付いていない。本書は教室で日本人とネイティブのチームティーチングの教材として使われるのがよいのかもしれない。

一方、『基本スペイン語文法』はスペイン語を独習できる文法書であり、文法的な説明はたっぷり付いている。その特徴は「はしがき」の次の説明に明らかである。「スペイン語の学習において、誰もが最初につまずくのが「動詞の活用」である。本書では、動詞の活用が暗記しやすいように、私独特の「不規則S型動詞」や「準規則L型動詞」のような名称を動詞分類に用いた。」本書ではスペイン語の学習者にとって難関の「動詞の活用」や「時制」がより容易に習得できるよう、大いなる工夫が凝らされている。しかし本書の魅力はなによりも読んで楽しいということではないだろうか。著者の博学が随所に生かされており、この本1冊でスペイン語に関してかなりの知識が身につくはずである。しかし、『基本スペイン語文法』は江藤メソッドを導入するなど、新境地を開こうとする試みがみられるが、例えば、「点過去」と「線過去」という従来の文法用語の名称の使用においては疑問を残すことになった。点と線といって著者は分かって、果して学習者は本当に分かるだろうか。

先の『詳解スペイン語』では「点」と「線」の使用をこう批判している。「単純完了過去の説明に際して「点過去」という名称がしばしば使われるが、誤解を招きやすい。…単純完了過去の基本的な性格は…過去における事象の「完了」を表すことにあり、時間の長短を想定させる「点」や「線」ということではない。」今、日本におけるスペイン語教育に求められていることは、文法用語の名称を含めて、これまでの文法を一度洗いなおして、21世紀の学習者に新しいスペイン語文法と教授法を考案することではないだろうか。

ばんどう しょうじ(教授・スペイン語学)